

# 平成27年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成27年度資源評価](#) > ダイジェスト版

標準和名 ヒラメ

学名 *Paralichthys olivaceus*

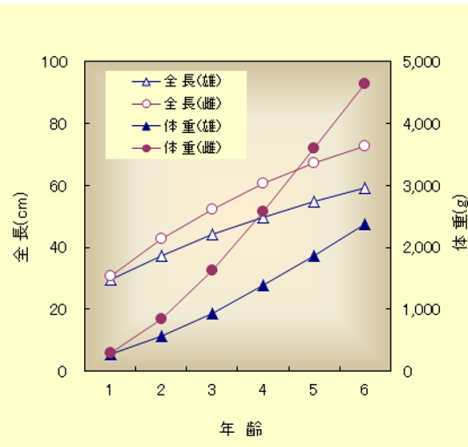
系群名 太平洋北部系群

担当水研 東北区水産研究所



## 生物学的特性

寿命：雄10歳以上、雌20歳以上  
成熟開始年齢：雄2歳（100%）、雌3歳（100%）  
産卵期・産卵場：5～9月（盛期6～8月）、沿岸各地の粗砂および砂礫地帯（水深20～50m）  
索餌期・索餌場：沿岸各地の主に水深30m～150mの陸棚  
食性：着底稚魚はアミ類、全長10cm以上は魚類やイカ類  
捕食者：着底直後はヒラメ（0歳魚）やエビジャコ類、着底後1～2ヶ月はヒラメ（1～2歳魚）や他の大型魚種

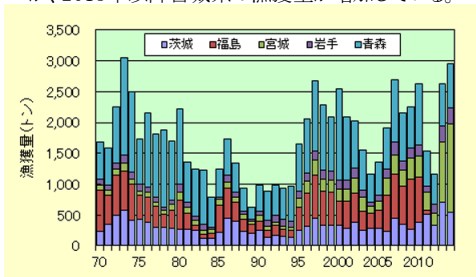


## 漁業の特徴

小型底びき網、刺網、定置網、沖合底びき網等により周年漁獲されている。漁獲物は、全長50cm以下の1～2歳魚が大半を占める。資源保護と管理を目的とした水揚げ物の全長制限(30cm、地域により35cm)が実施されている。また、1990年台から種苗放流が盛んに行われている。2013年は154万尾の人工種苗が放流された。

## 漁獲の動向

漁獲量は10年程度で周期的に変動している。1995年以降では、2004年に最低となったがその後増加し、2006～2010年はほぼ2,000トン以上を維持した。東日本大震災(震災)に伴う漁獲努力量の大幅な減少により、2011、2012年は大きく減少したが、2013年以降回復し、2014年は2,950トンであった。震災後は福島県の漁獲が大きく減少したが、2013年以降宮城県等の漁獲量が増加している。

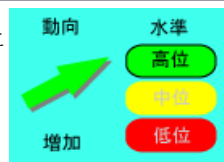


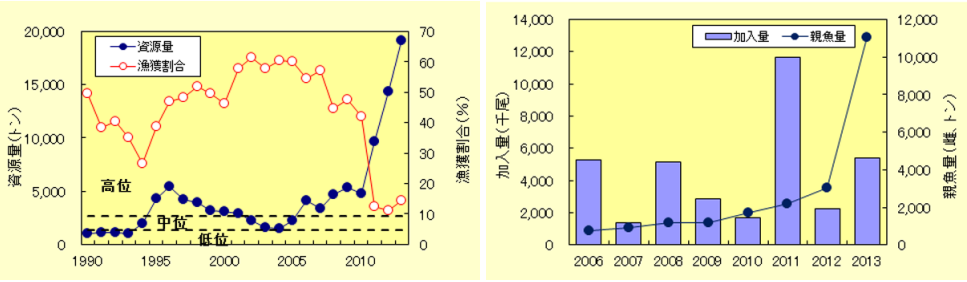
## 資源評価法

震災により福島県の漁獲が大きく減少したことから、1990～2005年漁期(7月～翌年6月)は福島県、2006～2013年漁期は宮城県、福島県、茨城県の雌雄別年齢別漁獲尾数を基に、コホート解析により資源量を推定した。この値を海域全体に引き延ばし、系群全体の資源量とした。

## 資源状態

資源量は1996年漁期をピークに減少し、2004年漁期には1,500トンとなった。2005、2007、2010、2012年級群の加入量が多かったため、2006年漁期以降増加している。特に2010年漁期以降は、震災による漁獲努力量の減少と2010年級群の好加入が同時に生じたため、資源量が急増している。2013年漁期の資源量は19,183トンであった。親魚量も2013年漁期は急増して11,057トンであった。漁獲割合は震災後減少し、2011～2013年漁期は11～14%となっている。震災前20年間(1990～2009年)の資源量推定値の最高値と0を3等分して、下から低位、中位、高位とし、2013年漁期の資源量水準は高位と判断された。2009～2013年漁期の資源量の推移から動向は増加と判断した。





管理方策

資源水準は高位で、震災前の漁獲圧を維持しても当面は1990年以降の平均的な資源量水準を維持できると考えられることから、震災前3年間（2007～2009年漁期）の漁獲係数Fの平均値（F2007～2009）を管理基準として2016年漁期ABCを算出した。2014年漁期以降の1歳の資源尾数は、2006～2013年漁期のうち加入量が非常に多かった年を除いた4年間の平均値を与えた。

| 管理基準       | Limit/Target | F値   | 漁獲割合 (%) | 2016年漁期ABC (千トン) |
|------------|--------------|------|----------|------------------|
| F2007～2009 | Limit        | 0.66 | 43       | 6.65             |
|            | Target       | 0.53 | 36       | 5.65             |

- Limitは、管理基準の下で許容される最大レベルの漁獲量
- Targetは、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、管理基準の下でより安定的な資源の増大または維持が期待される漁獲量
- ABC算定規則1-3)-(1)を用い、 $ABC_{target} = \alpha \cdot ABC_{limit}$ とした。係数 $\alpha$ には標準値0.8を用いた
- F値（漁獲係数）は各年齢の平均値である
- F2007～2009は2007～2009年漁期の漁獲係数の平均値
- 2014、2015年度のF値は、2011年3月に発生した震災の影響を考慮し、それぞれ2007～2009年漁期の平均値の0.40倍、0.43倍とした
- ABCは10トン未満を四捨五入した
- 漁期年は7月～翌年6月

資源評価のまとめ

- 資源水準は高位、動向は増加
- 2005年級、2007年級、2010年級、2012年級の資源豊度が非常に高かった
- 2013年漁期の親魚量は非常に高い水準であった
- 震災による漁獲圧の低下と2010年級群の加入が良かったため、資源量、親魚量が急増している

管理方策のまとめ

- 震災前の漁獲圧を維持しても、資源量を1990年度以降の平均的なレベルに維持することができる
- 震災前3年間の漁獲係数の平均値（F2007～2009）を管理基準としてABCを算定した
- 水揚げ物の全長制限を今後も維持することが、資源管理に有効である

執筆者：栗田 豊・玉手 剛・服部 努・柴田泰宙

資源評価は毎年更新されます。